

Title	契沖、曼陀羅院・圓珠庵
Author(s)	八木,毅
Citation	懐徳. 1955, 26, p. 67-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90287
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 陀 院 圓 珠 庵

涯を靜かに閉ぢた。 (市電上本町四丁目束へ二丁北側) 究の 上に 月二十五日といふ日に、契沖は日本古典の注釋や字音研 今から約二百五十年前のことである。元禄十四年の 大きな 足跡をのこして 大阪市天王寺區餌 の圓珠庵で六十二歳 の生 差町

借りれば次の如くである。 も大きく 寄興して 來られたのは 久松潜一博士 であつて (契神全集第九卷参照)、久松博士の作られた 契沖略年譜を 契沖の學問とその傳記および傳記資料の研究紹介に最

ケ崎時代

1歲(寬永17年)—11歲(慶安3年)

②今里妙法寺時代 ③高野山時代 13 11歲(慶安3年)—13歲(承應元年 歲(承應元年

23

歲(寬文2年

と述べてをられる。

⑥和泉久井時代 ④生玉曼陀羅院時代 29 2723歲(寬文2年 蔵(寬文8年 歲(寬文6年) ) 27 )—34歲(延寶元年 29 歲(寬文8年 歲(寬文6年

高野時

⑩圆珠 ⑨再妙法寺時代 ⑧ 攝津我孫子時代 旅時代

51歲(元祿3年)-蔵(延寶7年)—51歳 歲(延寶5年)—39歲(延寶6 **-62 歲(元祿14** 

木

毅

高野山 つたが學問に生きようとする契沖は、 つたらしい。曼陀羅院に三四年ゐた後瓢然として寺を去 住職になつている。 丰定のもとに徒弟となり、二年ほど後、 いて久松博士は、 **丰定がひとりで曼陀羅院の維持にあたつてゐたらしい。」** 右のうち④については契沖二百五十年記念講演會にお に悩んでゐたやうであります。 へ修行に出、 「契沖は十一歳の頃、 十年の後、廿三歳の頃、曼陀羅院の この院は丰定の衆務してゐた寺であ 契沖の去つた後は 學問と寺の雑務と 妙法寺に入り、 眞言宗の本山、

一係があつたといふことは知られてゐたいやうである。 そして今までの調査では⑤以後契沖は再び曼陀羅院と 玉曼陀羅院といふのは生玉十坊とい はれた生玉神社

曼陀羅院· 圓珠庵

万町時代

35

歲

(延寶2年

38

蔵(延寶5年

下高津 觀晉院 南 と圓 つた。 藤村叡 院に併合され いつた具合に他寺と併合していつたり、 坊は圓照寺 が見られ つてゐる今日、 相當密接な關係にあつたのではないかと想像される。 K 坊法案寺以下、櫻本坊· à 珠庵との相互關係を知ることは非常に困難である 0 ける塔 戦災で過去帳など<br />
資料とすべきものを失つて 運 醫王院 現在 ば、 る。 K それらは明治初年の廢佛毀釋に遭つて櫻本 地 てゐる。大正六年十二月に圓 契沖以後明治以前の間 珠庵の前にはその生玉持明院 KC 遍照院は<br />
青蓮寺に、 のひとつであつた。 立退いたりした。 地蔵院・覺園院・ 新碱院・遍照院 曼陀羅院は現 持寳院の九ケ寺の名 攝津名勝圖繪 地蔵院は藤 における曼陀羅院 南ハ坊の 珠 の住職 庬 心で歿 次寺 如きは には 在 持明 K しま であ L 龙 が

と。 ら解放されて古典の研究に專心した時代と思 は れ て きら解放されて古典の研究に專心した時代と思 は れ て き略年譜の⑩圓珠庵時代といふのは契沖が一切の雜務か

ふものを作つてゐる。そのはじめにかうある。
支丹宗門取締りの必要からか「寺院五人組判形帳」とい
元祿八年、堕落した寺々の風紀をひきしめ、かつは切

差上申一村

組を相改致連判上可申旨被仰渡則書上候。五人組連先年大坂天滿諸宗寺々五人組之帳差上候今度も五人

院の住職を兼務してゐたことを實證すべき資料がないの

九月といへば、契沖といふ角印がおされ

契沖が圓珠

施に

入つて五年目

Ŧ.

てあることが注

目される。

それはさて

おき、

右

の曼荼羅院のところ

ĸ

は

である。

今のところ、

その前後に渉つて契沖が曼陀羅

之者御 判之內不致吟味宗旨手形 後五人組替り又者印刻仕替候はば御斷 寺へ被傳達、 々被仰付 座 由 候歟其外不依 、奉得其意候。 本人は勿論依其時之品五人組共越度 何事公儀 を出 組中常 L 御 Ħ. 以平吟 法 那 中 度 VC 味可仕候o向 一々申上 . 切支丹宗門 一候はば

爲後日仍如件

の判形帳を開いてゆくと元祿八乙亥年九月

ح

院 以下 は分らない。 たものと考へられるのであるが、 生玉十坊外のものであり、 をみると曼陀羅院を併合したこの持明院とい る寺院九人組を編 解消 南 奥德院・大福院の後に付して四人組をなしてゐる 眞言宗古議生玉社 ノ坊を除く八ケ寺の名が列び、 していつたのはどういる事情によるものか筆者に 成 してゐることが見え、 僧 寺格も曼陀羅院 高野山質性院末寺曼荼羅院 曼陀羅院 生玉社 持明院は資珠 が持明院 よりは低 九ケ寺に ふのは本 0 か

がどこ 外に P との頃 務も相 肼 0 とを物語つてゐるのかも知れない。 曼陀羅院 したり は 松博士は、 の半ばを以て塔頭九坊 とも思はれる。 たいか 頃まで綾 兼 のであつて、 和歌の題 V 伊勢物語の研 ざら である。 係で、 大して目 へる。 職」といふ實のとも から る。との元祿八年以後には萬葉集の講義をした以して晚年の研究生活の最後を飾つた時代であつた の契沖は紀記歌謡や古今集・ としてをられ の無職が或ひは には契沖自身の研究生活の資を得しめるため あつたことが考 には いた 同が 彼が 生活の資を得てゐたかはよく分らない 主として義公から生活上の補助を仰い といふわ 星 柳 (當時南 契沖の晩年に至るまで續いたとは考 物語つてゐる) 水戸義公の 究を一通り完成させ、 家が かといふことは しい業績ものとしてゐないのを見ると、 多かつたといふことである けで . る。 の經營に充ててゐたと言はれる) 「閑職」ではありえなかつたこ ノ坊は三百石の扶持をうけ、そ なつた閑職をもつて遇 へられるし、 晩年の 依頼で萬葉集代匠記 2 確 しかしさうしたことが のことは漫吟集中の 彼は曼陀羅院 かに 百 圆珠庬隱棲後の契沖 知る 和字正 契沖との因縁もあ 人一首などの註 ことが 濫 を著述 鈔を 住職とい ī から、 だので が、 ~ たもの きな 契沖 刊行 へ難 久 냪 何 蹇 K

> ふ名目を得て なに が L かの食祿を得て ねたので あら うと

7

定

な

ことが言

へないのは残念であるが、

かとも

حے

るので 海北若沖などは、 近 孤 以 集集 世畸人像に 剛 Ø あ 「錄沖公遺 筵は元禄九年から始め と傳記さ ح の頃 れてゐる沖門の今井似閑 一部」によれば、回 製神の摩 呟 5 いれたと に接した 出珠心に ٧× も ふことで お 野 Ď け で H る 忠肅 あ 契 らう あ 帲 ŋ Ø

三輯 年7月に大阪大學文學部國文學研究室で發行し ととにしたいと思ふ から、 0 次 M 珠 Ш 契沖特輯號」 それについては久松博士の御研究なり、 雁 珠 KC 庬 ついて新しい資料をもつてゐるわ のととについて語らう。 所收の諸先生の論考を御參照ね といつても契沖 けでは た語文第 昭和26

代

と思は

たつ いと思ふ。 それでわ たかといふことを報告して與へられた資をふさぎた たくしは戦後の圓珠 施がどうい 必經 過 でどう

ある たのでさう た。 館 和二十年三月二十三日の空襲 K 契沖終焉の處として史蹟に が、 契沖の稿本やその他の手澤本はすべて大阪 過 されさらに した貴重な資料のすべて 去帳はなくなつてゐるために 泉州 犬鳴山中の K 指定され あつ て焼失 某寺に疎 は事たきを得 7 る 歷代住職 た関 L 開 7 され 立府 珠 たの の名さ 施 圖 7 は 7 書 0 昭

一陀羅 Ш 珠 庬

知 り得 な と言つた 現狀 である。

た北島 所屬が ろが 時の頃から よる 大阪國 長には 珠庵再興の方途についての相談を持込んだ。 纂室勤務の田村吉永氏を介して同室長の北島葭江氏 谷寺の助力によつて燒跡に庫裡 の年の十月四日までには、 ちに募金運 事業に關興できないと考へ、大阪女子大學の平林治 つづいて五月七日から十二日まで大阪三越 契沖顯彰運動に最初の盛りあげをはかつたのであつた。 は朝日新聞大阪本社講堂において久松博士以下諸學者 契沖時 至つたことが牧支報告書に記錄されてゐるのである。 たらよい 廿 1戰災 契沖阿闍 文談 から 氏は營利を目的とする電鐵會社では到 五年秋、 L 復 か回 動 れ 興 はおそらくさうではなかつたであらうが、 といふことになり、 話會を母體として、 て大和長谷寺の末寺となり、 Ø K たところ、 .梨二百五十年記念講演會」なるものを開催 ため 本格的 珠 契沖關係 B> 庬 かつたのである。 には眞 rc 昭 再興を發願 和廿 (言宗御室派 Ö 在阪國文學者の懇親團體である 諸資料を展視 約六萬圓の淨財が寄せられる 一年五月、 談話會員の赞同を得 回珠厖再建後接會を設立 一棟が假設される した同 廿六年一月廿六日 VC 風してゐた。 廿四年春には した。 一寺では、 眞言宗豐山派 K 相談 ; For 底さうし かくてと 版を受け 近鐵編 に至 ż と . て直 德學 VC 阗 長 た VC 何 KC VC

> 圆珠 れがいつまでも契沖に何の が 二十四日 のではないといふことだけは明ら ふことであるが、 ふととであつた。との高田 範學校の教官高田十郎 ついで廿七年冬の或る日、 ところ 施 戦災後そつくり剝落 K (E) あ 日新 Ö 右の Ē. 井 繭 朝 記 碑面保存の功を認めるに 洲 刊にスクー 念講演會 0 撰 氏 しかけて 総故もない が持ち歸つて保存してゐると K 心ひ申 たる 大阪國文談 氏はその後 が開催され プされた かに 々」といふ案内を受け わたのを、 契沖の墓碑 しあげたきことができ 處で私さるべきも しておきたい。 亡く た二日 話 ところに 會 當時 して なら 銘 々員の中で 前 Ó の奈良 )碑文面 8 よると 0 たと 月 7

師

 $\vee$  $\vee$ 

注文で、 その脚 ちが來年の た者が を張つて「大阪をどり」なるものをするので、 ましたのでぜひ御光來賜りたく云 が談話會営事 ある。そこの生徒および卒業生つまり藝者および半玉た 「このたび折りいつてのお願 藝者學校 なるもののあることを知つたといふことで があつた。 苯 それに契沖顯彰の所作物を 原稿を書いてほ 奢、 者側のみそであつた。 大劇場で東京の 先生たちはその招待の しいとい 「あづまをどり」の向 ふのが藝者學校校長の 一つ加へてとい 夜 K, はじめて、 ついては . ج ا Ş,

大阪南 年 四 地藝妓總 月 E 出演と稱する「 から十二日まで、 大阪をどり 大阪 歌 舞伎 座 が カ> MC Ъ> ħ る

めた との それを斡旋 賑 させるのは全く困つたことだ」といふ苦情が新聞  $\mathfrak{P}$ ととに はせたりし K の食員は あ ため教育現場からは のであつた。 なつた。 絢 東奔西走、 Ļ てちょつとした波爛があつた。 たる舞臺に太閤を舞はしめ、 談話 會としては五十萬圓近い收入を得 一方、 會々員 府市教育委員會は所管の各學校に 談話 「學校で藝者をどり 十三氏が作詞した長唄 會ではその入場券を賣るた 契沖を踊 の券賣りを たが、 紙 ٠ 上を 6 虢 太

KC などの印刷物がくるやうになつた。 办 海賢氏が 年の生涯 . 6 はじめ圓 力> 契沖阿 庬 住持の を閉ぢられた。 住 珠庵 膱 閣 O 北覺隆 職を襲がれることになつたのである。 梨顯彰會といふ名にあらたまつて趣意書 再建後接會といつてゐたものが 氏は再建 そして同氏の長女政子氏の夫北 の日を待たずして七十三 との年も暮 の十五日 V うの 頃

である。

八日に その かり、 基金が昭 た。 大阪 學校 府 冬空も澄み渡つた十一月廿五日 和 ・大阪 は n 千九 や個人などのを合はせて二百八十萬圓 年の末にはできた。 市からも夫々五 二十四目でろからぼつぼつ工事に 十萬四 起工式はその十月十 K づつの寄 Ŀ 一棟式 が 附 行は とり [近くの が であり n 71>

ん

てする費用が はじめ、 上に 依賴 法隆 莫 寺の復元工 大なのと、 7 珠 権の復元 哥 全く燒失 の設計監督をされ が構想されたが、 してしまつた史蹟 10 それ 浅 野 K

펒

心陀羅院

Ш

珠

脈

ろ現 復元 とい なり、 大口 彰會の理事會がとの記念館で初會合を開いたといふこと に工事は一 の設計によつて前埼工務店の手で着工。三十年六月中頃 はれ 6寄附者 代風 したところで指定物件にはならないの 記念館 てゐる。 VC 應完了した。そして七月八日に契沖阿 0 府 こて記 建設に計畫は變更されることになつた あ それは大阪女子大學講師の角尾篤 たりから出て、 念館とした方がよからうといふ 復 元計 置はとりやめ だ から 開梨顯 意 彦氏 のだ 見 T

どを保管する文庫の建築などはなほ先 現することを祈るとともに、 け淨財でもつて滿たされ、 してゐると報告されてゐる。 ところで、それらのためにはまだ約 の合力を下さつて契沖の學德顯彰の上に一石を投ぜられ それにしても境内の慕を修築 ととを願 ひ禿筆をおくこととする。 題彰會の計畫 B 讀者諸賢に たくしはこれが したり、 = K 百萬回 豫 遺品 おかれ が 定され 一日も早く 近くが や自筆本 できるだ ても應分 てねる 不 庭 な 躗

附 祀 提供をうけた。北海賢氏ならびによ とも殆んど同 金森旅館女將長谷川福恵氏所藏のものと二 元祿八年の「寺院判形帳」は四天王寺と、 一のものである。本稿執筆にあたつて圓珠庵 大阪女子大學跡見昌雄氏には 部あるが、 阪 一部資料 江戶 斓

「語文」所收小島吉雄博士の解説を御巻照ねがひたい。五井臨洲撰の契沖墓碑銘と懷徳堂との關係については前

112

謹んで訂でいたします。 な多海賢氏、在多覚隆氏の設りですので、北海賢氏、在多覚隆氏のおりますのは夫々、北海賢氏、北寛隆氏とありますのは夫々、本誌「契沖、曼陀羅院、円珠庵」の文中、新 こ